

事業所活動紹介

各事業所ごとの取り組みについて
紹介いたします。

『Withコロナで行う今年度の活動や生活支援の取り組み』

グループホーム支援センター
みらい

2年間のコロナ禍での中、今まで行っていたような外出に制限があったり、新年会や忘年会を近くの飲食店で行うようなイベントができなくなってきました。

様々な障害特性を持つ利用者にとってコロナに

感染してしまうことは大きなリスクになってしまったため支援する側も常日頃から自身の生活状況にも注意を払っての対応となっています。人込みの中に出かける外出等は極力避けていたため、賑やかなことが好きな方には不自由な思いをさせてしまいましたが、安全なイベントをと考えて提供しています。主にお食事が多くなってしまいましたが、普段の食事と違った雰囲気や美味しい物を食べられるように、様々な店からメニューを取り寄せたり、写真など分かりやすい方法で1人ひとりから選んでいただくなど工夫をしています。

また、季節のイベントは日中事業所では行う事の出来ない夜の花火など、楽しんでいただきました。これからも、ホームならではの楽しみ方を考え提供していければと考えています。

[グループホーム支援センターみらい
副所長 梅津久美子]



『週末はお店の美味しいコーヒーを楽しみたい!!』

グループホーム支援センター
心音

グループホーム支援センター心音を利用されていたMさんはコーヒーが大好き！近所にあるカフェに、ブラックコーヒーを買いに行くのが週末の楽しみになっていました。なかなか声に出して注文するのが苦手なMさん。お金と一緒に飲みたいコーヒーのメニューが書かれてあるカードを見せて、いつも注文しています。時々職員も一緒に出かけると、店員さんが笑顔で「いつもご来店ありがとうございます」と声をかけてくれる姿があり、地域にあるお店を毎週末利用することで、自然に店員との交流が生まれていることに、職員一同感動していました。以前、一度だけお店にご迷惑をおかけしてしまったことがあり謝罪に行った際、「(一人での)またご来店お待ちしておりますとお伝えください」とのお言葉をいただきました。

昨年4月、Mさんが空き部屋が出た他グループホームを見学したところ引越を希望され、新たなグループホームでの生活がスタート。週末のコーヒーを心配していましたが、新しいグループホーム近くにもカフェがありました！さっそく職員と一緒に

お店に行き、店長さんにご挨拶。ご本人もお店側も安心して毎週末に美味しいコーヒーが満喫できるよう緊急時の連絡先をお伝えし、1か月は職員と一緒に外へ出て慣れもらいました。休日に楽しめる趣味があると、生活が潤います。近所にコーヒー店があって良かった！

お客様を大切に思い対応されている接客やサービス内容は、私たち福祉の現場でも学ぶべき姿勢があると感じています。店員に負けないくらいの笑顔を大切に、どんな場面でも相手の立場に立った対応ができるよう職員一同努めています。

[グループホーム支援センター心音
支援員リーダー 浅野 るみ]



「子どもたちの出会いを奪わないで」

障害者権利条約の審査勧告 インクルーシブ教育の改善

昨年9月に、我が国の障害者権利条約について国連から改善勧告が出ました。精神科病院への強制入院制度の廃止と障害者施設の脱施設化に向けて期限付きの計画を求め、教育に関しては、特別支援学校の生徒が10年前の2倍になっているのは明らかに条約に逆行しているとし、分離した教育は社会の分断を生むとして国家目標を立て法律、制度、予算に渡りインクルーシブ教育の実現のため行動計画を示すよう求める強い内容となっています。

この話題にはネット上では色々な意見があります。専門的な支援を受けられる支援校が必要だ等、勧告を否定する意見も少なくありません。今の現況ではそういった意見にも同意できますが論点がズレていると感じています。地域の学校のすべてに、障がい者に配慮された環境と専門性を持った教師による支援を受けられる仕組みを作る、そのために国の具体的な行動を求める勧告だと言うことです。言い換えると、その仕組みが今まではなく、限られた選択肢の中で親や関係者は子どもにとって最善と思う判断をしてきた訳で、その事を否定してはいけません。勧告は、この国のインクルーシブ教育が形骸化しないために根本的な改革(法改正や予算措置)をする必要があると要求しているのです。

障がい者差別を研究している調査報告※の中に「あなたと障害者の関わりは」という調査で、日本は「障害者と関わったことがない」という割合が他の国と比べてダントツ



社会福祉法人愛泉会理事
児童デイサービス月のひかり 所長
村上 実

で高いという報告でした。関わったことがない人が調査対象者の半分の51.9%。(欧米は20%台)障がい者の理解は知識としては進んでいるけど、実際に関わる経験がないので真の相互理解にはなっていないという事でした。そして更に興味深いのは、単発の行事等での触れ合い的な出会いは、逆に「自分たちとは別のグループの人たち」という認識を強めてしまう。真の理解は、できるだけ早い時期に、当たり前で日常の中で一緒に生活をしていく事が大切とありました。正に条約の求める姿だと考えます。

私たちは、子どもの素直な感性や寛容性にいつも教えられます。障がいや障壁を作り出しているのは私たち社会だという自覚を持ち、障害者と関わった事のない人が半数を占める社会構成から先ずは脱却していくことが必要だと考えます。

子どもたちに「差別はいけない」と教える一方で、障がいをもった子どもたちの教育機会は差別されても仕方ないという矛盾を早く変えていきたいですね。

※大阪市立大学大学院 野村恭代准教授「施設コンフリクト調査」より

支え愛

『支援への道しるべ』

今年、息子は39歳になりました。

20年ほど前、強度行動障害事業の一貫で、川西町のコロニーで自閉症行動対応の支援を受けておりました。その頃は、思春期特有の荒れていた時期でひと握りの人しか信頼できず、拒絶でしか自分を守るすべを知りませんでした。その後、向陽園へ移ることになり、入園する前にスタッフの方が幾度も息子の元へ足を運び、信頼関係作りからのスタートを始めました。又、息子も早く園に馴染めるように園の方へ何度か、顔を出させて頂きました。その頃向陽園では日中の決まった活動はなく、コロニーで作業していたスキルスクリーンを日中活動として継続することになり、そこから園での日中の活動の場が増えていったと、記憶しています。

その後も試行錯誤の支援のなかで、大変ご苦労があったと思います。担当者も何人も変わりました。でも支援へのこころざしはどの方も同じでした。問題が起これば、事前にサインを出していたのでは？状況はどうであったか！など深く掘り下げた支援でした。当時、園では多くの方が生活しておりました。混沌とした生活の中で、不安が爆発するのかガラスを叩き割る行為も何度かありました。息子も他の利用者も心も体もゆっくりと休ませられる、生活の場があればいいなと感じておりました。

グループホーム支援センター天花
利用者ご家族

伊藤 芳子



今は生活の場をグループホームぶどうの木に移し、日中の活動は天花でお世話になっております。ホームでの生活や、天花での活動の中で得意な分野、苦手な作業、参加にあまり興味がない活動もありますが、励まされたり、声かけで促されたりして活動の輪の中に参加させていただいています。又、息子自らも困った時は、スタッフの元へ助けを求めに行けるまでになりました。日常会話で笑顔にさせてくれたり、時には我慢することも学びながら、日々送っています。当時のスタッフの方々はこの成長を、頼もしく見守ってくださいます。「知らぬが仏」と言いますが、過去を知らず何も臆することなく、触れ合ったり、息子をやさしいと誉めてくれるスタッフも増えました。

こうして今があるのは、今も昔も含めて、多くの方に支えられながら、支援の道しるべを歩ませていただいたからと、感謝しております。私達家族も支えの力になれるように頑張ります。この先もこの道程が長く続くことを願いながら。